

特別企画

学長インタビュー

世界へはばたけ東工大生

東京工業大学

相澤益男
学長



昨年の10月、本学に相澤新学長が誕生した。大学をとりまく状況が劇的に変わりつつある現在、学長は「人類の質的な豊かさの実現」を大目標に、また「知の時代を切り拓く人材の育成」「科学技術の知の創出」「知的資産の社会還元」という三点を東工大の三大使命として掲げ、新時代の大学運営に取り組んでいる。

今回は、新しい大学運営の方針に関連して学長が学部生に求められること、また国立大学法人化が我々にどう影響してくるかなどについてお話を伺った。

＊ ＊ ＊

今、学部生に求められることとは？

これから大学を運営して行くに当たり、学部生の教育方針に関してどのような考えをお持ちでしょうか。

学長 学部生と大学院生の教育方針を明確に仕分けができるかどうか、これはなかなか難しいのですが、学部生の場合は、専門的知識を持っているかどうかということと、論理的な思考ができるかどうかということ。社会が最も注目しているのは

このような面なんです。幸いなことに、東工大の学生は他大学の学生に比べればそういう面ではかなり高い評価を受けている。しかしながら、高い評価を受けていない面もある。キーワードとしてはコミュニケーション能力。思い当たる節があるんじゃない？ これは別に英語でのコミュニケーション能力という意味だけではなくて、もっと一般的に人と対話をするとか、あるいは自分を表現するというのが東工大の学生は苦手らしい。そこで、広い意味でのコミュニケーション能力をもっと学生につけてもらいたいと思っています。

コミュニケーション能力というのは、日本語でのコミュニケーション能力とそれから外国語でのコミュニケーション能力、両方においてのものです。東工大の学生はよく英語が弱いとか言われますが、それはペーパーテストでどうのこうのという意味の英語能力についての評価ではないんです。言語というのは一つのツールなわけですから、それをツールとして用いて何かをするということが東工大の学生には欠けてるんじゃないかと言われているわけです。それは、多分普段余りそういう能力が必要とされていない状況に生きてるからだだと思います。それで、私は日本語と外国語におけるコミュニケーション能力というものを、徹底的に、体系的に教育するべきじゃないかと考えています。これを是非身に付けて欲しい。

それから、国際的なリーダーシップを発揮できる人間に育って欲しい。日本にとどまらず、世界的な視野に立った指導性とかリーダーシップといったものを自分に持つべきだということを意識してもらいたい。

リーダーシップというものは生まれつきのものでは・・・

学長 ガキ大将とか、そういう要素もあるかもしれない。でも、もっと意識化されて然るべきなんです。さっき言ったように、東工大の学生が一般に社会的な評価が高い。というのは、与えられた仕事をきちとこなすという絶対的な信頼なんだ。だけど、仕事を与えるほうの立場になると、指導性の能力というものがやっぱり欠けている。専門的なことをきちとこなすし、ちゃんと考えることもできる。そういう点では東工大の学生は非常に良い素質を持っているんです。ところが東工大の学生には、知らないうちに自分の周りに枠を作ってしまった、その中でだけ一生懸命やるという傾向がある。だけど、今の国際的な時代の状況を考えると、そういう人間はだんだん働く場所が無くなってくるんじゃないかと思う。

確かに与えられた仕事をきちとこなす人間が必要であることも事実だ。だけでも今中国や韓国がインターネットとかのグローバルなネットワークを使ってすごい動き方をしている。学生が、完璧な文法にのっとってはいないけども英語を使ってインターネット上で相当アクティブに活動している。東工大の学生には、本当にどの大学と比べても負けないぐらいの良き真面目さと真剣さがあるんだけど、それがもっと他に影響を与えるような形で活かされていいと思う。それを意識化しないとやっぱり駄目だと思う。

さっき私がコミュニケーション能力と言ったけれども、例えば日本語だけで考えても、コミュニケーションするためには先ず自分を表現できなきゃいけない。



つまりプレゼンテーション。そのプレゼンテーション能力を養う教育が、今までは往々にして抜けてしまっていた。学会発表という場では、場合によっては早ければ卒論の段階で学会に発表のチャンスがありうるかもしれないけれども、どうやって自己を表現するかということを形式的に教えられている。しかし、より低学年の時からどうやって自己を表現するかということを教えるべきだと思う。そもそも、どうやって自分を表現するか、本当はそれが国語なんだ。だけど「国語」というとなんか別のものをイメージするだろうから、「大学で国語を」なんてもし私が言ったら「何で今ごろ」とかって思われるかもしれない。だけど、作文をするとか、何か自分の考えてることをみんなの前で述べてみなさいということは、つまり自己表現、プレゼンテーションの仕方を言っているわけです。そういうものを体系的に学ぶべきなんだ。日本はどうもそういう要素をないがしろにした教育をしてきたわけです。だから英語でも基本的なパターンを習うっていうのは、そういう自己表現をするための手段に過ぎない。

コミュニケーション能力っていうものは、そうやって自分を表現するっていうことがまず第一にある。それから今度は対話をする。ディベートと呼ばれるものです。ただ楽しく会話をするっていう目的で日常英会話を習うというような感覚じゃなくて、ディベートというのは、いい日本語がないんだけど、ある考えに対して賛成と反対っていう対極を明確にして、議論する。相手を論理的に、徹底的にやっつけるわけです。そういう訓練が今の東工大生には欠けている。だから、何か議論をするというときに、今の東工大の学生はすぐに負けちゃうと思う。

それは他の授業に織り交ぜるという方法でカリキュラムに組み込むわけですか？

学長 そういうこと。そういうことを通してコミュニケーション能力をつけるということをやっていかないといけないな、と思っています。その上で目標として国際的リーダーシップを発揮できるようにする。だから国際的という意識をもっと持ってもらいたい。しかも、それはただか外国人と交流するとかそんなレベルじゃなくて、あなた方が生きていく道を国際的に求めて、時代を切り拓いて行く必要があるという心構えを持ってもらいたい。なにか道が拓かれているところに飛びついて一生懸命ここでやっていこう、というだけではなく、自分が新しく道を拓くんだっていう気概を持って欲しい。それが、教育面における、特に学部生についての私の期待。そういうことが教育できるように、仕組みとして強化しなければいけないところは強化したい。

国立大学法人化の影響は？

国立大学法人になるということで東工大としても色々と準備していると思いますが、そうすると学生に対する影響というのはどのように出てくるのでしょうか。

学長 例えばどういうことを心配してる？

今までの国立大学だと、国からこうですよという方針が与えられていたのに対し、その部分を大学が自由に決められるようになると、その決定の過程が学生には分からなくなるのではないかと思うのですが。

学長 だけど今までだって見えていないでしょう？ 一般の学生は授業料がどうやって決定されるかなんて知らないと思うけど。

勝手に値上げしやがって、とかって（笑）

学長 そうそう。だけど、学生を苦しい状況に追い込んで大学を運営していこうなんていう、そんな発想は基本的にない。そんなことはしなくて済むように、財政的基盤をがっちりとさせなければいけないと思っています。学生に何か悪い影響が及ぶようだったらそれこそお伺いたてるよ、そりゃあ。

だけどこれはそういう問題じゃなくて、もっと根本的なところの大変な仕組みの変化なんです。これからの日本を切り拓いていくためにどういう部分を活性化しなければいけないか、ということを考えて組織作りをするとき、今までの学生が居づらい雰囲気にするようでは、何の意味もないわけです。さっきから言っているように、あなた方に国際的に活躍するような学生に育って欲しい。それを実現するためにはあなた方にとって不満な仕組みだっているいろいろあるだろうし、そういうものを改善していく必要がある。素晴らしい人材を育てるという目的のために、教育環境、研究環境というものを整えるようにしなければいけない。組織を変えてまでもそういうものに向かって行こうというわけです。だからあなた方には、国から自分たちに非常に大きな期待がかかっているということを理解してもらいたい。他の国の動きとかを見れば分かるけど、国際的なレベルで人材を育成するということは本当に重要なことなんですよ。ぜひ、自分たちがやるぞっていう意志をもって活躍してもらいたい。

これだけ少子化が進んできて、私立大学においては受験する志望者の数がどんどん減って、受験料の減少だとかあるいは定員割れだという形でいろいろ影響が出て来ています。幸いなことに東工大は入学試験での志願者の数は減ってない。でもこれも将来どうなるかはわからない。だけどそれは結局大きな意味での社会との関係が影響として出てきているわけだから、良い評価のある大学には必ず人が集まってくる。さっき言ったようにあなた方が活躍していけば、それぞれがいろんな社会的な評価に関わってくる。そういった評価が人的に良い人材が集まることに繋がるだろうし、財政的に色んな資金を獲得できることにも繋がってくる。そうすると学内を、さらに研究環境、教育環境の良い状況にできる。そうするとさらにもっと...、という良い循環を作ることができれば、国内でトップはもちろん、外国の大学にも何の引けも取らない、本当にトップレベルの大学にできてくるんじゃないかな、とこういうことですね。



「枠」の中から飛びだそう

最後に、学生に対して何か一言お願いします。

学長 今学部に必要なことは、物事を広い視野で眺められる学生を育てるということだと思います。今7つの類に分かれていますが、殆どの方はそれぞれの類に入って、学科所属して、さらに研究室に所属するときまで、始めの類の分野をずっと引きずって行ってしまふんです。これはちょっと問題だと思います。類って言うのは、本当は言わば飯の居場所としてあるわけです。私が東工大のことを理工系総合大学と言っているのは、別にいろいろなものをデパートの専門店のように持ってますよ、という意味ではなくて、この中で理工系と考えられるものは自由に色々やりとりできるような仕組みであるべきという考えでそう呼んでいるわけです。だから学部生という最も自由な立場であるときに、自ら壁を高く作って学内での交流すらしない状態でずっと類の中だけで育ってしまうというのは、理工系総合大学の持っている大きな特徴を活かせていないと思います。そういう視点から見ると、四大学連合の複合領域コースいうところに行っても、今度はその複合領域の中にだけ閉じこもってしまう、ということになりかねないんじゃないかと心配しています。

転類とか転学科というのはちょっとハードルが高いところがあってなかなか...

学長 だからそこまで動くんじゃないくて、私が言っているのは、本当に普通の学生生活においてサークルとかで人との交流をしていない人もかなりいるということです。普通の講義にしても、聞くことができる他学科の授業がいっぱいあるのに、わざわざ他の所まで行って聞いてこようとかは殆どやらなくなってしまったのではないかな。とにかく、仕組みとしては色んなことができるような状況でありながら、自分に近いところに枠を作って、その中で生活してるんじゃないかな、と思えるようなところがある。だからもっと視野を広く持ってもらいたい。そういうような意識で、ぜひ活躍していただきたいと思います。

ありがとうございました。



読者の中には、学長の言葉に自分を当てはめられることのできる人も多かったのではないだろうか。本文中では残念ながら紹介できなかったが、学長からはこのほかにも大学の運営に関する事など、様々なお話を伺うことができた。今回のインタビューを通して、私はそれまでの自分の生活を少し見直すことができたと思う。

最後になりましたが、お忙しい中快く取材をお受けいただいた学長先生にこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

(曾我部 豪)